

書 評

藤本 利治 著：

『歴史時代の集落と交通路——三重県について——』

地人書房 1989年4月

A5判 265ページ 3,700円

書名は標題のごとく『歴史時代の集落と交通路』とあるが、サブタイトルに「——三重県について——」とあるように本書は“三重県における歴史地理学的研究とその諸問題”ともいべき著書である。著者は伊勢市の皇学館大学の教授であり、三重県をフィールドとしたものが多く、それらを集大成したものといえよう。そして内容も、「集落と交通路」に限定されることなく多岐にわたっている。参考までにその構成を紹介すると、次のような内容となる。

I. 自然的環境——位置・地形・気候

II. 歴史的背景

第1章 神宮領荘園の分布と地形環境（神宮領荘園数と分類，神宮荘園の立地と微地形）

第2章 中世城館分布にみる地域性（中世末集落と変貌，北勢における中世城館集落の分布と結節地への統合，中南勢における中世城館集落の分布と中心集落化）

第3章 御師活動からみた近世日本の地域性と山田の町（御師活動の地域性，御師と山田の町）

第4章 国界変動にみる歴史的背景（伊勢国と志摩国の境界，志摩国と紀伊国の境界，伊賀国の境界，伊勢国と尾張国美濃国との境界）

III. 交通路編

第1章 交通路の概要とその地域性（陸上の交通系，海上交通路と主要港町）

第2章 伊勢・伊賀両国の古代交通路

第3章 伊勢・志摩国駅家考（伊勢国榎撫駅家考，志摩国鳴部駅家考，志摩国磯部駅家考）

第4章 二つの藩道——伊賀街道と和歌山街道——（伊賀街道，和歌山街道）

IV. 集落編

第1章 竈方集落（竈方とは，竈方の起源，大方竈について）

第2章 宿場町島ヶ原と石薬師（大和街道島ヶ原宿，「軒別絵図」からみた東海道石薬師宿）

第3章 近世松坂の都市構造（城下町松坂の形成過程，城下町としての都市構造，商人町としての都市構造，武家街区と町屋街区）

第4章 御師と羽書——門前町山田発達の一背景——（御師の商業活動，山田羽書と門前商業）

第5章 農村工業の村・丸柱（丸柱窯業の歴史，窯業発達の背景，特色と現状）

第6章 豊久野の開発と高野尾の発達（豊久野の自然環境，集落の成立と土地利用，豊久野の土地利用の変遷）

以下，各章ごとに内容を紹介してみよう。

歴史的背景編の第1章「神宮領荘園の分布と地形環境」は，古代から中世にかけて広く分布した伊勢神宮領荘園，すなわち御厨，御園を論じたもので，伊勢国の荘園713のうち91%の647が神宮領荘園であり，その分布から伊勢国の地域性を浮き彫りにしようとしている。そしてその立地を微地形より考察したものである。とくに伊勢平野の特色である浜堤との関係は読者の興味を深めている。ただし欲をいえば，この項では，あるひとつの地域だけでもよいから地形分類図を付して論ずるならば，さらに理解を助けたことであろう。

第2章「中世城館分布にみる地域性」では，軍事的機能としての城館ではなく，集落とのつながりの城館集落を論じ，その後の都市的発展の道程を重視している。鈴鹿川を境として北勢と中南勢に区分し，それぞれメッシュマップで分布上の特色を，地形と豪族とのかかわりのなかで比較している。

第3章「御師活動からみた近世日本の地域性と山田の町」は，各地における御師活動からその地域性を明らかにしようとしたものであり，国別の御師数，御師1人当りの檀家数，国別総人口に対する檀家数などの統計資料から，その地域性を論じたユニークな研究である。また御師と山田の町は著者の得意とするところであり，他の鳥居前町，たとえば上賀茂神社鳥居前町との相違などから山田の御師町の特色を論じている。

第4章「国界変動にみる歴史的背景」は，それぞれ伊勢国と志摩国，志摩国と紀伊国，伊勢国と伊賀国，伊勢国と尾張・美濃両国との境界紛争と帰属を

めぐる歴史的背景を総括したものである。

交通路編の第1章「交通路の概要とその地域性」は、近世における主要な街道と海上のルートと港町を取扱っている。ここではタイトルに概要とあるように主要なルートを概観しつつ、三重県における陸上交通系を、北勢の畿内（西国）と東国を結ぶ道路系と、伊勢神宮に求心的に向かうものとは分類できるとしている。海上交通としては、当然のことながら伊勢湾水運を中心として、安濃津の盛衰、宮と桑名・四日市間の紛争にも論究している。

第2章「伊勢・伊賀両国の古代交通路」、第3章「伊勢・志摩国駅家考」の2つの章では、駅家の比定と古道の復元を中心としている。とくに伊勢・伊賀両国の古道では、たんなる復元ではなく、遷都による宮道の変化にウエイトをおいている。また駅家考では、伊勢国榎撫駅の比定について、従来の桑名説、香取説に対して戸津説（三重県桑名郡多度町戸津）をとっている。桑名の地形的環境と戸津と多度神社との関連、さらには対向駅の馬津（愛知県津島）への渡河条件などを考えるとき、きわめて説得力をもつ説といえよう。

第4章「二つの藩道——伊賀街道と和歌山街道——」。この2つの街道とは、藤堂藩の津とその城代をおく上野を結ぶ伊賀街道と、紀州藩の和歌山とその城代をおく松阪を結ぶ和歌山街道のことで、この街道を利用する大名のほとんどが自藩主であり、自藩のための施設、制度であったため、藩道と称される。この街道は五街道や脇往還ほど知名度はないが、両藩にとって最重要な街道であったため、宿場町などもよく整備されていたことが、それぞれ平松宿、波瀬宿など著者の精査をきわめた調査から知ることができる。また内陸盆地の上野と伊勢湾を、またメジアンラインを利用して紀伊水道と伊勢湾を結ぶルートは、三重県の地域性をよく表している。

集落編の第1章「竈方集落」では、村方・浦方・山方に対し、熊野灘沿岸地方では竈と称される特殊な集落が認められ、それぞれがひとつの藩政村を構成していたこと、そしてその消長を多面的に考察している。

第2章「宿場町島ヶ原と石薬師」は、近世大和街

道の宿場町として発達した島ヶ原と、東海道の宿場町石薬師を論じたものである。前者の島ヶ原では近世にいたるまでの発達過程を、後者では軒別絵図、地籍図からその内部構造を解明したものである。

第3章「近世松阪の都市構造」は、城下町としての都市構造よりも、城代支配以降の松阪が商業都市として卓越性をもつ近世都市であったことを、地域構造より明らかにしている。

さらに集落編では、農村工業としての丸柱窯業の発達過程と現状について、最後の第6章では津市西北部の洪積台地、豊久野の開発過程のなかで現在の花木栽培について、その市場性の問題にまで論を展開している。

本書について全体を通して強く感じるのは、サブタイトルに三重県を中心とあるように、この地方の地域性を浮き彫りにしたいという著者の意識である。

そのことは、あとがきに「……三重県は東西日本の接点に位置し、県下には日本の各時代の歴史を色濃く投影した地域が多い。それだけに実に地域性は多彩であって伊勢神宮の所在地ということを除けば格別のイメージは出てこない。そうしたなかから集落と、それを空間的に組織する交通路の二分野についてフィールドを選定して調査を行ってきたのを、まとめたのが本書である……」とあり、またⅡの歴史的背景のはじめに「古代から現代に至る伊勢平野（国）の地域像を通時的に描きたいと念願している筆者にとって、まず着手すべきは古代から中世にかけて伊勢国にひろく分布した伊勢神宮領荘園、具体的には御厨・御園を通じての地域の把握ではないかと考えた。すなわち分布・立地・規模・土地利用を通じて地域性を抽出しようということである。…」とあるのをみてもわかる。

しかし、三重県という行政区分のなかで地域概念を把握するのは至難であり、ましてや歴史地理学的に地域像を描くことはさらに難解であろう。それに敢えて取り組んだ著者の研究姿勢に、あらためて敬意を表したい。

最後に枝葉のことであるが、写真を多く用いれば、地理プロパー以外の読者に一層の理解を深めるのではなかろうか。（伊藤安男）